

特集 学校以外の教育の場

●出典：「育てる」通巻206号 昭和60（1985）年8月25日発行

ある学習塾教師のたわごと

坂本 実（学習塾経営教師）

私はかねてから退職後も子供達に好きな数学を教えたい、教育課程や教師仲間縛られない自由で独創的な教育をしてみたいと望んでいた。それで、退職の半年前から小さな教室を住居とは別棟に新築した。その教室は学校の教室のミニ版で机・椅子・教具・印刷機など全て学校と同じ物を揃えた。ただ子供向きの本はかなりの数用意しておいた。読書は学習のルーツであると思っただからだ。

高校を振り出しに中学まで、三十年余の教師体験か

ら能力差に応じた指導の壁の厚さは骨身に染みている。かつて遂に救い得なかつた何人かの子供達のことを考える時、いつも胸が痛む。今度こそ、私の小さな教室でそれをやり遂げようと決心した。

私の教室は定員十五名の無差別学年編成（複式学級）で教材は手作りのものを二、三種類使用し、一斉授業を出来るだけ避けて、子供との対話による個別指導を行なっている。

一番苦心して工夫したのは教材で、それぞれの生徒に合わせて作るようにしている。これは骨も折れるがやりがいのある仕事である。始めの一年目は毎日これに時間を使った。

学習塾とは、学校では手の届かぬ子供達のために学



校の先生の手伝いをする所である、と私は考えている。だから、申し込みに来る親や子供達には、必らずその旨を話し、つまづきが直つたら、教室をやめて自分の力で勉強をさせるようにすすめている。人を頼らず自分の力で出来る限りの努力をする子供、そういう子供に、私は育てたいのだ。

教育とは、子供達の持っているものを引き出し、それを高め、彼等に美しい感動を与えることだと思ふ。全ての生きものが、持つ本能的欲求はもともと「善なもの」なのだ。人もまた同じで、まして子供の欲求は素晴らしいものなのだ。彼等の欲求を引き出して、それに応えてやるのが大切である。人はだれでも本来学びたがるもので、子供にはもともと学びたがる欲求などないと考えるのは誤りで、学びたがらないのは、本来の欲求をゆがめられたからだ。

子供達を勉強嫌いにした主な原因には、次のようなものがあると思う。

1. 不幸にも彼等と心の共鳴を持つ教師との出会いがなかった。
2. 教材が難しすぎたり、内容が無感動的であった。

3. 競争心のみを煽る差別的学習であった。
4. 他の子と比べたり、成績が上がつたら何か買つてやるという励まし方のまずさ。

5. 利益本位のマスコミ（テレビ、本など）。

ある子供達は、いたずらに競争心を煽られて非協力的にされ、等級づけられ、差別感や劣等感をいただき、やがて無感動・無気力・無関心にと変えられて行く。あわれにも彼等はじつとそれに耐えるか（エリートコース）、あきらめるか（落ちこぼれ）、激しく反発するか（校内暴力）のいずれかに追い込まれて行く。近ごろの子供は……などと無責任なことを言つていられるのか？ そんな子供にしたのは、ほかならぬ私達大人なのではないのか。

「教育は環境の整備にある」と言われている。子供達の環境（家庭・学校・町・都市・国）は、彼等が自分達の要求通りに、自分達で作つたものではない。それは全て大人達によつて作られたものである。大人は自分達の創造力が、子供等の要求と協力的であるかを、責任を持つて反省してみる必要がある。この点、自然の創造物（自然環境）は人によつて、それが破壊され

ない限り全て子供達の欲求を満足させている。大自然の中で彼等を育てる事は、大いに意義のある事なのだ。

私はかつて、公立中学校教員だったころ、自分のクラスの子供と日曜ごとに奥多摩の山に登った。子供達も私も、美しい奥多摩の山を愛した。その数年後、私は奥多摩町立氷川中の教師になり、山の子供達と温かい心の触れ合いを持った。自然は子供達と私との心をいつも一つにつないでくれた。だから、今でも私は夏休みと冬休みには、教室の子供達をキャンプとスキーの自然学習に参加させる行事を行なっている。

五十八年六月に、退職金で栃木県的那須に私の小さな林間学校である「守子寮」を作って夏休み中、無料で中学生等に使わせている。これは、私の長年の夢だった。十五畳と八畳の二間で、他にテントや寝袋・炊事用具一式を用意した。子供達は、自分等でテントを張り、食事を作る。登山の引率以外、私は一切干渉しない。食料は持参で、集合解散は現地であるから往復は自分達だけです。自分の子が信頼できる親は参加させればよいのだ。また冬休みには毎年一月の四、五、六日にスキー教室を行なう。初心者でも三日目にはブルー

クで林間コースのミニツアーを楽しめるようになる。別に毎年七月下旬に、小学生だけの一泊キャンプを奥多摩の鳩ノ巣で行なっている。

私の教育寸景

1. 早く来た子に本を読んでやる。お化けの本が好きだ。今週は「日本昔話」を読む。数日するとその本をだれかが借りに来る。

2. 答案はノートに式↓計算↓答をきちんと書かせる。答が出せても式が書けない子が多い。わけがわからず解法のパターンだけ暗記している子もいる。出来ると、わかるとは、必ずしも同じではない。

3. 上級生が下級生に教えている。子供「先生よりも良くわかるよ。」私「がっかり」

4. 中学生は帰る時「ありがとうございました」と言って帰る。これは、私が彼等に要求した事ではない。「しつかりしてるよね。」

5. 「これからは自分でやりますから」と言っても行く子がいる。「頑張れよ。わからない時はききおいで。」成長したなあ……でも何だか寂しい。

教えていて一番うれいしいのは、始め貝のようにおどおどと自信の無かった子が二、三カ月で、はつきりものを言い、とても元気に質問に来た時だ。私はその子を抱きしめてやりたい気持ちになる。

私の疑問

ある親達はなぜ一流校と称する学校へ入れたがるのだろうか？ 私には何が一流なのかわからない。どの学校もそれぞれの優れた点を持っていると思っっている。人は自己の特色を生かし、助け合っって生きて行けばよいではないのか？ 学歴まして偏差値などが、人の値打ちを決める尺度にされてはたまったものではない。生きて行くために最も必要なものは、丈夫な身体と優しい心だと思っう。世の中で一番尊いものは人の命だから。また心の優しい人は、他人の立場に立っって物ごとを考えられるから、人と協力できるし、良い友人も持てるだろう、人は孤独では生きられない。

健康的な遊びによっって、丈夫な身体を作らせ美しい詩、音楽、絵、物語、劇などを温かいシャワーのように子供に浴びせかけ優しい心を育てあげたいものである。

過日、NHK第二放送である作家が、「小学校ではよく遊べよく遊べ、中学校ではよく遊べよく遊べ、高校ではよく学べよく遊べ、大学ではよく学べよく学べ、でなくてはならない。」と言っうのを聞いたが、私も全く同感である。

●出典：「育てる」通巻208号 昭和60（1985）年10月25日発行

心の支えをみつけてほしい我が子へ

原田 君枝

「面、こて、胴」

緊張した三分間。

小さい体に剣道着を着て面をつけ、竹刀を持つて、必死に試合をしています。応援している大人達も、思わず手をにぎりしめ、相手が面を打つてくると、自分までも体をよけながら声援をしています。小さい豆剣士達の試合は、かわいい気合いにみんなの顔もなごみながらの応援です。中学生、高校生の試合には、竹刀の交わる音も鋭く、気合いも底力のあるどっしりした

声に、会場もシーンと静まりかえり緊迫した空気につつまれます。そして、勝敗が決まると、一斉にホッとしながら、盛大な拍手を送ります。これこそ、場内が一つの心になつているといえるでしょう。

我が子が剣道を習うようになったのは、小学校一年生の七月下旬の頃です。学校生活にも慣れ、何か、大人になつてからも心のよりどころになるものを身につけさせたいと思つていました。今の世の中は、なかなか厳しいものです。そこで、仕事に疲れて帰つてきた時、あるいは、思うように捗らなく行動できない時等、仕事に関係なく自分に没頭できるもの、心の支えになれるものがあれば、気分転換にもなり、精神的にも肉体的にもよいと痛感するので。我が子にも、大人になつた時そんな気分転換ができるものを身につけさせたい。自分にあつた趣味が見付けられるように、何かを習わせてあげたいと常々考えていました。

長男は、祖母も叔母も一緒に住んで、大人ばかりの中で育てられたせいか、気やさしいが依頼心が強い子なので、どこかに、自分ひとりでも通える範囲で、子

供がやってみたいと思うものはないかと探しました。……あつたのです。

小学校の体育館で、日曜日の二時から三時三十分まで、剣道のけいこがありました。「これは」と思い親子で、二、三回見学に行きました。その時には、私から何も言いません。三回目に、

「どう、やってみようか」

と、にこにこしながら問いかけました。自分の友達も楽しそうにやっていたからか、

「……やつてもいいけど」

と、やや消極的ですが返事をしました。そこで、役員さんにも話をし、入会しました。次の日曜日にはどうかしら……と心配でしたが、何も言わずに行きました。私も一緒に行きました。日曜日ごとに、しばらく一緒に通つていると、時には

「行きたくない」

と、だだをこねることもありました。とにかく、続けさせました。

長男が三年生の時に、長女が一年生に入学しました。親としては、女の子だからクラシックバレエか何かを

習うようにするといいなあと考えていました。さつそく聞いてみると、

「剣道を習いたい」

と言いだしたのです。迷いましたが、自分自身が選んだのだから良いだろうと思い、一緒に習わせることにしました。丁度その頃、役員の順番が回ってきました。子供達がスムーズに練習できるように、八名の父母が事務をします。役員をすることで他のお母さん達といろんな話し合いをし、教えられることがいっぱいありました。剣道以外に子育ての悩みも話し合うことができました。又、子供達は、自分達のために働いてくれている親を見て、休みたいとは言えなくなつたようです。おかげで、二人ともマイペースであるが休むこともあまりなく、コツコツ続けることができたのです。子供達は、練習に行くまでが何となく気が重いようですが、終わって帰ってくるときは、おもいつきり体を動かしてくるので、すつきりさわやかな顔をして来ます。そんな顔を見るたびに、私も「よかつたなあ」と疲れがふつとんでしまします。

現在は、長男が五年生、長女が三年生です。兄妹で練習に通っています。剣道は、週に一度の練習の外に、年に一回級審査があり市内の剣道大会や親善試合等、数回試合があり、自分自身の技を競い合うチャンスがあります。試合の前の緊張感、試合中の集中力、負けた時のくやしき、勝った時の充実感。さらに、自分の技に対して、その年令なりに考えさせられたり、先生の励ましやアドバイスにうなずいたり、とても良い人生経験だと思えます。もちろん、試合だけでなく、日常の練習の時にも、集中力や忍耐力が要求されます。たしかに、剣道は地味なものです。決して華やかなスポーツではありません。しかし、孤独なスポーツではありません。「人の振り見て、我が振り直せ」のことわざのように、常に人に教えられながら、自分の体で納得しながら、自分自身を高めていけるスポーツだと思えます。私は、子供達に、この剣道を勧めて本当に良かったと思っています。精神力、忍耐力、集中力、さらに礼儀作法を少しずつでも身につけていってほしいと思っています。子供達も五年目にして、ようやく少し剣道のおもしろさがわかってきたようです。これ

からも、長年、コツコツと築き上げてきた自分の技に反省と自信をもちながら、さらに自分にも厳しく、友達とも大いに学び合い、助け合いながら自分自身を高めていつてほしいと思います。

現代は、大変環境に恵まれており、いろいろな分野の習いごとがすぐ身近にあります。習おうと思えばすぐ入会でき、やめたいと思えば、すぐやめることができます。しばらくして、また他のことに入会したいと思えばできる。というように習いごとがはん濫していると思います。こんな時代こそ、親の考え、本人の考えが大切だと思います。何はともあれ一度習い始めたら数年は続けることだと思えます。ある時期には、子供だけでなく大人でさえも行き詰まるものです。そんな時こそ、親の励ましの言葉や環境づくりが必要になります。子供と一緒に悩みながら、話し合いながら続けさせることが大事だと思います。行き詰ったからやめるのではなく、ある目標を決め、その時までは何があっても続ける。その後は、自分自身で、さらに続けるかやめるか決定すればよいというように、ぜひしてほしい

いと思います。苦しいこともあるが、なんとかそんな時は、親子で一緒に苦しんだり、工夫したりして励ましながら乗り切つてほしいと思うのです。その乗り切つた後の充実感と自信こそ、大人になった時の心の支えになってくれるものだと思うのです。我が子にもこれからも努力し、ぜひ、この充実した気持ち味わつてほしいと思つていきます。そして、大人になるまでに、いろいろなことに挑戦し、自分の心に支えになるものを見付けて、力強く生きていつてほしいと思います。

●出典：『育てる』通巻254号 平成元(1989)年9月25日発行

もつと子供たちを「自然な状態」の中に：

夏休みの活動報告書から

榊原 直一（都立高校教諭）

八坂村は名前の通り、上り下りの坂ばかりの村です。子供達の交通手段は徒歩だけでした。この5泊6日の間は、ただひたすら歩いたという思い出が、強烈に残つたことと思います。この行事で歩くことの目的は、歩

きながら自然と直接に触れ合うことにあります。つまり、歩きながら、都会生活では味わうことのできない、自然のたたずまいに触れることにあるのです。ですが最近では注意を喚起したり、説明をしなければ気にもとめない子供が多くなってきました。トンボ、バッタ、カエル等の動くものにはまだいいのですが、樹木、草花、畑の栽培物等の特に動かないものには、興味、関心を示さなくなってきたのです。子供であれば、今まで目にも耳にもしたことの無いものに接したならば、興味、関心を寄せ、すぐに体を動かすのが自然な姿なのですが、それを失わせたなものかが、私たちの周りにあると考えざるを得ません。

今の子供達の興味、関心の対象は何だろうかと考えてみますと、自分達が捜し求めて得たものではないことに気付かされるのです。その対象は、常に大人達の都合によって用意され与えられ、子供達はただその中から選ぶことしか、できなくなっているのではないのでしょうか。そして大人達によって導かれた「流行」という名のもとに、皆と同じであることを強要されているのではないのでしょうか。さらに子供達にもまた、他

の人と違うということを極端に嫌い、皆と同じであることに安心をする、という変な現象が定着しているのです。このことが、子供達の本来あるべき興味、関心の芽を変な方向へと導き、没個性化を招いてしまっているのではないのでしょうか。子供は本来自由奔放な存在なのです。それを大人の都合に合わせた枠に当てはめてしまうのは、どんなものでしょうか。

子供達と接していると、大人として考えるべきこと、為すべきことの難しさ、責任の重大さを痛感します。子供達を「自然」の中に置く以前に、「自然な状態」の中に置くことが先決問題であるような気がしてならないのです。現在の社会の中にあつては、それは大変不安なことであり、大変難しいことでもあることはよくわかるのですが……。

再掲載を受けて――

育てる会の子ども達

石川 寿（現・山村留学指導員）

最近の子どもたちは忙しい、といつのころからかそう言われて久しい。学校の宿題に習い事や塾に日々追われ知識を詰め込むのに忙しく、近所の友達とのんびり遊ぶ時間など全くないのではないだろうか。増してや近年PCやスマートフォン等のテクノロジーの急速な発展により、昔とは比べ物にならない量の情報や知識を頭に入れるのに厭（いと）わない環境となっている。確かに情報や知識を得ることは必要なことだし良いことでもあると思う一方、このままエスカレートしていったらどうなるのだろうか。一抹の不安もある。成長期の子ども達は、人間として広い分野に興味関心が広がり膨らむ時期でもある。そんな貴重な時期に昼夜を問わずちよつとの隙間時間にSNSやインターネットゲームやネットサーフィン等に興じる姿は残念な気がしてならない。

私が育てる会の子ども達に初めて出会ったのは今から35年ほど前になるが、その時のことは今でも鮮明に覚えている。テレビもラジオもない、ゲームもお金も漫画本もない山村での共同生活。皆都市部から来た都会っ子達で本当に一年間親元を離れて生活できるのかと、指導する立場でありながら疑問と不安をかかえていた私だったが、間もなく屈託のない笑顔でのびのびと、そして活き活きとした姿を目の当たりにして驚かされたのである。もちろんホームシックもあり慣れない生活で初めは戸惑いや苦痛を訴える子もあつたが、共同生活を通して共に支え合い、また受け入れ農家の方からも励まされ、保護者からのエールも受けて乗り越えていく。長い通学路や異なる環境にも慣れてくると、子ども達の様子が一変し表情や言動にも変化が表れ始めてくる。一言でいえば自然に返るとでも言うのだろうか、本来の子どもの姿が見られるようになってくる。不思議なもので、このような姿は35年経った今も変わらずに続いている。

例えば、口のまわりを紫色に染めて「見て、こんなに採れた」と満面の笑みでビニール袋いっぱい下校途中に桑の実を見つけて採ってきたり、春には山菜を夏や秋

には木の実やキノコを採ってきては調理して、あるいはそのまま食べたりする。時には農家で食べたイナゴや蜂の子がご馳走だと言う子も。野菜作りがしたくて山村留学に来たという子は、農家の人に聞きながら実に立派な大根を育てあげた。その他にも、自分で竿から仕掛けまですて工夫して作り、釣りに興じる子、キャンプや登山、船舶活動やスキー、太鼓や民舞、地域の文化や習慣、木工細工や草木染等々、子どもの興味関心は千差万別にある。

育てる会が大切に行っていることは、知的好奇心をくすぐること、ワクワクドキドキする体験や感動体験や成功失敗体験等々、子ども達が今後の世の中を生きていくうえでぜひ子ども時代に体験して欲しい事を様々な角度から実践している。その結果、子ども達が自らやりたいたい、やってみたいと思えることが一つでも二つでも原体験として残り、後々物の見方、考え方、感じ方に深みや厚みを加えることになればと願っている。その活動はいわば子どもの数だけあり、縦横無尽でありたい。子ども達の世界は、大いに刺激され広がりを見せるに違いない。育てる会の子ども達は、色々な活動を通してまたは集団生活や農家生活を通して自律を学び自立することの

大切さを仲間と共に学んでいく。もちろんそれは絶対的に保護者の応援、協力そして、理解があつてのこと。そこには、目に見えないたくさん大人の一人ひとりの子どもに愛情をもつて接し、決して過保護や過干渉にならず、子どもの後ろに立つて安全に注意を払いながら見守る姿勢、信頼がなければならぬ。

時代の急速な変化、少子高齢化、地球温暖化、そして新型コロナウイルス、と問題が山積であるが、育てる会の子ども達には、情報や知識に偏らず、生きていくうえで大切な知恵をたくさん学びながら、心を育て、このグローバル社会を生き抜く力を身に付けていってくれたらと願っている。



くらぶち英語村のネイチャートレイル